

# 初 年 次 教 育 学 会

ニュースレター 第 7 号

Japanese Association of First Year Experience  
at Universities and Colleges

初年次教育学会 事務局分室

〒162-0801  
東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター  
TEL: 03(5937)0473 FAX: 03(3368)2822  
E-mail:jafye-office@bunken.co.jp

事務局  
金沢工業大学 藤本元啓研究室内

## 今号の内容

- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| 1. 巻頭言             | 5. 第 8 回大会について           |
| 2. 研究担当からのお知らせ     | 6. 2014 年度「初年次教育実践交流会」報告 |
| 3. 学会誌編集委員会からのお知らせ | 7. 編集担当より                |
| 4. 第 7 回大会開催報告     |                          |

### 1. 巻頭言 「初年次教育実践交流会」始動

初年次教育学会会長 安永悟 (久留米大学)

昨年 9 月の第 7 回全国大会 (於: 帝塚山大学) の折に開催しました理事会と総会において、新企画「初年次教育実践交流会」の実施をお認めいただきました。それを受け、地域活動活性化ワーキンググループ (責任者: 菊池重雄会長代行) で実施計画を策定していただき、2014 年度中に 4 回の実践交流会を実施することができました。その概要は本ニュースレターの「2014 年度『初年次教育実践交流会』報告」に掲載しています。各実践交流会の詳細につきましては、そちらをご覧ください。新しい企画にもかかわらず、この短期間に 4 回もの実践交流会が実現できましたこと、実践交流会を企画運営いただきました関係各位に、この場をお借りし、心よりお礼申し上げます。

本稿では、初年次教育実践交流会の目的を再度確認し、実践交流会の実施形態と開催方法について、4 回の開催を通して見えてきた方向性を確認しておきたいと思います。

初年次教育実践交流会の目的は、初年次教育に携わっている教職員の皆さんが、日々、創意工夫を懲らして展開している実践活動をさらに振興することにあります。そのために、実践者の皆さんが気兼ねなく集い交流できる場を、地域ごとに、できるだけ頻繁に提供したいという願いがあります。初年次教育の質的向上をめざし、初年次教育に関心のある人々を対象に、積極的な交流を活性化したいと考えています。そのなかで、参加者同士が協力・協同して、より望ましい初年次教育の実現に向けた具体的な活動が創発されることを期待しています。

初年次教育実践交流会の実施形態や内容は多様であって構わないと考えています。むしろ、多様であることが望ましいと考えています。今年度実施した 4 回の実践交流会の形態は多様で、研究発表、講演会、ワークショップ、クロストークが含まれていました。内容は、最近注目を集めているアクティブラーニン

グに関わるものが多い傾向にありましたが、ご存じのように初年次教育が対象とする内容は幅広く、今後、さまざまなテーマが採り上げられることは必然となります。実施形態や内容は、初年次教育担当者のメリットを第一義に考え、地域ごとの実情を加味しながら、決定すべきだと考えています。

また、初年次教育実践交流会の大きな特徴として、学会主催の実践交流会に加え、他学会や研究会との協力・連携を通じた企画運営をあげることができます。今年度実施した4回の実践交流会のうち、本学会主催が1件、関係する他学会との協力による開催が1件、既存の研究会を認定しての開催が2件でした。他学会や研究会との協力・連携を深めることにより、本学会だけでは十分に提供できない教育に関する情報を本会員に提供できること、および、教育に対して類似した志向性をもつ幅広い関係者との交流を促進できることを主なメリットと考えています。

実践交流会の実施形態や内容、さらには他学会や研究会との協力・連携などに関しては、今後の展開のなかで、地域活動活性化ワーキンググループを中心に検討していただくことになります。

各地域で、初年次教育実践交流会を開催したいと希望する場合は、遠慮なく学会までご相談ください。その地域の実情に合わせた実施形態と内容および方法について、一緒に考え、創っていきたいと思います。学会として、できる限りの支援をさせていただきます。

最後になりましたが、学会として、会員の皆さま一人ひとりに満足していただける活動の場づくりに今後とも取り組んで参ります。年1回の全国大会のみならず、これから各地で開催される初年次教育実践交流会にも、是非とも積極的に参加していただければと思います。

今後の予定として、学会主催による実践交流会が6月20日(土)に玉川大学を会場に計画されています。また、5月9日(土)に久留米大学で学会認定の実践交流会が予定されています。詳細な実施要項は決定次第、学会HPなどで告知します。会場で皆さんとお目にかかれることを楽しみにしています。

## 2. 研究担当からのお知らせ 会員調査への協力のお願い

**研究担当理事 一同**  
**代表 濱名 篤 (関西国際大学)**

本学会では研究担当理事をおき、学会員の皆さんの直面する課題を把握し、初年次教育の発展に資する研究課題を設定しています。昨年から今年にかけての課題は「高大接続と初年次教育」と設定し、地域研究フォーラム(岩手大学)や学会大会(帝塚山大学) 課題研究シンポジウムでの発表と討議の機会を提供して参りました。

他方、本学会は毎年新規入会される機関や個人会員が増加し、学会及び会員の実態や直面しておられる課題についての現状把握が十分できていません。以前にも一度会員調査を学会として実施いたしましたが、既に3年が経過し、この間に会員の数も増加し、直面している課題にも変化が見られます。そこで、5月上旬に会員の皆様を対象にした「会員調査」を計画しています。皆様の状況と課題を中心にWEBを活用したアンケート調査という方法をとることになります。学会のメルマガに記載されたアドレスに入って、所定期間の間にご回答いただく方式になります。

機関会員の場合は代表者の方が、個人会員の方はご自身でご回答いただくようお願いいたします。結

果は、学会大会や学会 HP などでご報告していきます。学会の今後の活動のため、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

### 3. 学会誌編集委員会からのお知らせ

編集委員長 笹金 光徳 (高千穂大学)

2015年3月15日発行の初年次教育学会誌第7巻第1号が、すでに皆様に届いているかと存じます。次号(第8巻第1号)の編集・発行および原稿募集については、第7巻第1号の146頁に詳細が記載されておりますが、その概略を記します。

- (1) 次号の発行時期について 2016年3月中旬の発行を予定しております。
- (2) 投稿論文の締切について 第8巻の投稿締め切りは2015年5月末日となります。ただし、学会誌の編集規程および論文の執筆要領に従っていない場合には、投稿論文を受領することはできません。そのような理由で返戻された論文を修正した上で再投稿する場合の期限も5月末日となります。提出期限際に投稿された論文については、規程・要領に従っているか否かの確認が期限後となり、結果的に査読対象から外れることもあり得ます。従いまして、作成した論文が編集規程および執筆要領に則っているかどうか確信が持てない場合には、3週間程度の余裕を持って投稿することをお勧めいたします。
- (3) 原稿の執筆、投稿、その他詳細について 初年次教育学会のホームページに記載している「初年次教育学会誌執筆要領」「執筆テンプレート」をご参照ください。指定した書式通りでない原稿は受け付けることができませんのでご注意ください。

<http://www.jafye.org/index2/shippitsuvoryo2014.html>

- (4) 投稿論文の提出先について 論文投稿用のメールアドレスは、[mjafye-edit@kokusaibunken.jp](mailto:mjafye-edit@kokusaibunken.jp) になります。
- (5) 投稿資格および1巻あたりの投稿数について 共同執筆の場合を含め、論文を投稿できるのは会費を納入している個人会員および機関会員に限られます。また、1巻あたりに投稿できる論文の数にも定めがあります。詳細は、初年次教育学会誌編集規程第9条をご確認ください。

<http://www.jafye.org/index2/henshukitei.html>

なお、論文の投稿数および採択率を上げ、学会誌の水準を維持することを目的として、第7巻第1号の127頁から藤田哲也前編集委員長による「初年次教育学会誌への投稿論文執筆について」という題目の特別寄稿論文が掲載されております。論文審査の過程について説明するとともに、論文執筆の準備を進める上での留意点や審査の評価基準など、論文執筆前に知っておくべきことが詳細に記されておりますので、論文投稿に意欲をお持ちの方は、必ず、かつ早めに、目をお通しください。

## 4. 第7回大会 開催報告

2014年9月4日(木)・5日(金)の両日、帝塚山大学(奈良・東生駒キャンパス)にて、第7回大会を開催いたしました。今年、本学は創立50周年をむかえ、この記念すべき年に、初年次教育学会の大会を開催できますことは、誠に光栄であります。本学では、本大会を大学創立50周年記念行事のひとつに位置づけました。本学が位置する奈良県奈良市は古都として知られ、春日大社では、20年に一度、神殿等を造り替える式年造替(しきねんぞうたい)を来年にひかえています。この機会に、ぜひ古都奈良をご堪能いただきたく、週末をあけた開催日としました。まずは、皆様のおかげで、本大会を成功裏に終えることができましたことを心より感謝いたします。

本大会は、金沢工業大学で開催された第6回大会に引き続き首都圏以外での開催となり、本学の立地からしても、当初、参加者数が少ないのではないかと危惧していました。しかし、結果的には、大会参加者423名、懇親会参加者159名という多数のご参加をいただきました。また、第6回大会と比較しても、ワークショップ11件(前回大会12件)、ラウンドテーブル2件(同3件)、自由研究発表11部会(同13部会)、個人発表51件(同52件)と、ほぼ同規模のものとなりました。

さて、本大会では「初年次教育における自己表現：表現から実現へ」をメインテーマとしました。これまで初年次教育において、「自己表現」自体がクローズアップされることは少なかったといえますが、自己をさまざまな形で表現することはコミュニケーションの第一歩であり、初年次教育にとっても重要なテーマのひとつと考えられます。そして、「自己表現」は「自己実現」へとつながっていくともいえます。このような思いが、本大会のメインテーマに込められています。

このメインテーマを具現化すべく、従来のシンポジウムにかえて、記念講演と大会企画フォーラムを開催

### 大会実行委員長 岩井 洋(帝塚山大学)

しました。記念講演では、「シンプルプレゼンのすすめ」と題して、プレゼンテーションの世界的な第一人者である、ガー・レイノルズ氏を講師としてお招きしました。同氏のプレゼン手法は、スティーブ・ジョブズ流のプレゼンに日本文化「禅」を融合させた、シンプルかつ記憶に残る手法として有名です。また、著書『プレゼンテーション Zen』は世界19カ国で発売され、約30万部の大ベストセラーになっています。講演会場は超満員となり、収容人員300をはるかに超える聴衆を集めました。講演では、終始テンポ良く、ユーモアあふれる話が展開され、シンプルかつ効果的にメッセージを物語る手法が実演されました。また、聴衆に意見を求めたり、聴衆同士で意見交換をさせる講演の進め方自体がアクティブ・ラーニングの手法そのものでした。その意味では、聴衆はシンプルプレゼンの手法とアクティブ・ラーニングの手法を同時に学んだといえます。

一方、大会企画フォーラムは「自己表現：表現から実現へ(造形)〈演劇〉〈文章〉」と題して、芸術表現、身体表現、言語表現に関わる教育実践が報告されました。いずれも、ワークショップ等の協働型の実践を通して、学生が自らを表現することに対する感動や新たな発見を得る過程について、詳細な報告がありました。3つの報告をもとにした議論では、自己表現と学問的知識との結合・接続に関する議論や、「リベラルアーツ」というときの「アーツ」という言葉からも、本来的に「学問はアート」に通じるとの議論などが活発に展開されました。同フォーラムにご参加いただいた皆様からは、次年度の大会においても、同テーマの部会を継続してほしいとのご意見も多くいただきました。

さて、いまひとつ本大会で実施した新たな試みは、課題研究セッションの開催です。同セッションは、研究担当理事が中心となり、初年次教育に関わる重点課題を設定し、話題提供にもとづき議論するものです。

同セッションは、本大会ではじめて設定されました。「高大接続の転機とこれからの初年次教育」と題する記念すべき第1回では、3つの報告にもとづく活発な議論が行われました。本来、同セッションは、従来のシンポジウムや記念講演と同等に重要なものであると理解していますが、他のセッション等の関係上、ワークショップおよびラウンドテーブルと並列するタームテーブルとなりました。研究担当理事をはじめ関係の皆様には、ご迷惑とご心配をおかけしましたこと、あらためてお詫びを申し上げます。タイムテーブル上、同セッションへの参加者数について心配されましたが、約150人の皆様にお集まりいただき、設定されたテーマに対する関心の高さをあらわす結果となりました。

大会運営に関しては、大学をあげて教職員一体となって取り組みました。参加者の皆様からは、通常、教員主導での大会運営が多いなか、教職協働がうまく実現している、との過分の評価をいただいたことは、誠に光栄です。また、20数名の学生スタッフも、特段の訓練をする時間的余裕がないままに当日をむかえたに

もかわらず、参加者の皆様から高い評価をいただいたことは幸いでした。本大会の運営は、本学のFD・SDや学生の教育にとっても、意義深いものであったと思います。

懇親会では、奈良市でも制定された「日本酒で乾杯を促す条例」に則って、シャンパンがわりに、本学と梅乃宿酒造株式会社とのコラボ商品「酒輪（しゅわ）（発泡日本酒）」で乾杯をさせていただきました。その他にも、「学長ラムネ」や大和伝統野菜「片平あかね」を使用した「大和ベジサイダー あかね」をはじめ、本学学生と地元企業、地域との連携による成果を展示させていただき、本学の取組を皆様にお伝えする貴重な場になったと感謝しています。

最後になりましたが、本大会を盛大かつ無事に終えることができ、本学の創立50周年記念行事のひとつにふさわしいものとなりました。あらためて、皆様のご協力とご支援に厚く御礼を申し上げます。

(本稿は学会誌第7巻掲載文章の再掲です)

## 5. 第8回大会について

### 第8回大会実行委員会委員長 菊地 滋夫（明星大学）

2015年9月3日（木）・4日（金）の両日、初年次教育学会第8回大会を明星大学（東京・日野キャンパス）にて開催いたします。教職員と学生が協力して、全学的な初年次教育に取り組んでいる本学におきまして本大会を開催できますことは、喜ばしく、名誉なことであると存じます。

大会テーマは「変わる初等中等教育と大学初年次教育」といたしました。受け身になりがちな高校までの学びを、大学生にふさわしい主体的かつ能動的な学びへと転換することは、初年次教育の主要な課題のひとつとされてきました。しかし、今般の中央教育審議会答申等に見られますように、大学入試改革と連動して、初等中等教育へのアクティブ・ラーニングの本格的な導入が検討されており、これが実現すれば、能動的な学びのスタイルをある程度身につけた学生が大学に入学してくることになります。大学に入学したばかりの学生の学びが受け身になりがちあることを前提に、その転換を目指してきた初年次教育は、何らかの意味で転機を迎えるものと予想されます。今大会におきましては、公開シンポジウム等を通して、来たるべき教育の姿を探ってゆきます。

今大会がより良い教育改革の一助となりますよう、関係者一同、しっかりと運営に当たって参る所存です。多数のご参加を心よりお待ちしております。

## 6. 2014年度「初年次教育実践交流会」報告

安永 悟 (久留米大学)

学会は、各地域における初年次教育の実践活動を振興する場として「初年次教育実践交流会」を2014年度よりスタートさせました。各地の大学・短期大学などで、創意工夫のもと、実際に展開している初年次教育の取組を、その担当者レベルにおいても豊かに交流することをねらいとしています。2014年度に開催した初年次教育実践交流会について、以下、その概要を報告します。

### ◎ 初年次教育実践交流会 「授業づくり研究会」

1. 日 時：2014年9月20日(土) 13時～17時
2. 場 所：久留米大学御井学舎学生会館3階 ミーティングルーム3
3. 参加者：52名
4. 実施母体：安永悟研究室(久留米大学文学部)
5. 内 容：

(1)【実践報告】石山信幸(久留米市立南筑高等学校)

- a. 題目：「協同学習を中核とした高校数学の授業改善：授業進度の加速と学力保障」
- b. 内容：協同学習に積極的に取り組んでいる南筑高校での実践報告。
- c. 参加者の声：

協同学習は時間がかかるという一般的な認識があります。しかし、生徒の力を徹底的に信じ、授業を工夫することで、それは誤りである可能性を、本実践は物語っていました。学力の差が大きく、計画通りに進まないことが多い数学の授業において、進度を速め、かつ成績も伸びたという結果に、参加者一同から感嘆の声があがりました。(須藤文・久留米大学講師)

(2)【技法の体験】須藤 文 (久留米大学)

- a. 技法名：ジグソー学習法
- b. 題目：「アドラーの言葉から自分の教育をふり返ってみよう」

c. 内容：協同学習の技法として最もポピュラーな技法「ジグソー学習法」の体験。

d. 講師の感想

現在多くの注目を集めている「アドラーの言葉」を手がかりに、自分の教育をふり返り、参加者の皆さんと交流しました。アドラーの言葉と自分の授業を関連づけ、専門家グループでもジグソーグループでも、活発な意見交流がなされました。特に、最後に行った、全体交流では、発表者の意見に共感したり感心したり考えさせられたりと、それぞれの教育観を問い直すものとなりました。(須藤文・久留米大学講師)

### ◎ 初年次教育実践交流会 (学会主催)

1. 日 時：2014年12月5日(金) 15時30分～17時
2. 場 所：崇城大学図書館6階 多目的ホール
3. 参加者：40名
4. 協 力：Q-Links事務局 & 崇城大学
5. 題 目：「初年次教育とアクティブラーニング」
  - a. 話題提供：松下琢(崇城大学)・藤本元啓(金沢工業大学)
  - b. 進行：田中岳(九州大学)
  - c. 内容：司会の田中先生のファシリテーションにより、話題提供者2名と会場参加者によるクロ

ストークが行われた。話題提供者からのライトニングトークを受けて、会場参加者は明らかにしたい論点を小グループで検討。その内容やコメントがホワイトボードに書き出され、話題提供者はそれに応じて(答えて)いく、レスポンスなワークショップ。会場で検討された内容は、ファシリテーション・グラフィックにより共有された。

#### 6. 参加者の声

私自身、実践交流会に参加し、初年次教育においてアクティブラーニングを実践する上で必要なことは、授業を行う教員、授業をサポートする職員、授業を受講する学生の意識改革が重要だと感じました。また、従来の詰込み型の勉強スタイルから、自ら考え、発言、行動する勉強スタイルへと変えることで、将来の社会人としての基礎が学べるのではないかと思いました。(前田和則・崇城大学職員)

#### ◎ 初年次教育実践交流会 「日本リメディアル教育学会 九州・沖縄支部会 第7回九州・沖縄支部大会(2014年度)」

1. 日 時: 2014年12月13日(土) 13時30分～17時40分
2. 場 所: 久留米大学御井学舎学生会館3階 ミーティングルーム1・2・3
3. 参加者: 約70名
4. 実施母体: 日本リメディアル教育学会 九州沖縄支部会
5. 協 力: 初年次教育学会・授業づくり研究会(安永悟研究室)
6. 内 容:
  - (1)【研究発表】英語部門3件、ICT活用部門3件、協同/協同・習熟度別学習部門4件の発表が行われた。詳細については日本リメディアル教育学会ニューズレターNo.73を参照のこと。
  - (2)【基調講演】青木多寿子(広島大学大学院)(1時間30分)

- a. 題目: 「大人数の教職必修科目で行うLTD話し合い学習法: 理論的背景と実践の工夫を含めて」
- b. 内容: 協同学習による教育の必要性と具体的な工夫、さらには、その有効性に関する理論的かつ実証的な解説。

#### 7. 参加・協力者の声

今回、日本リメディアル教育学会の寺田貢会長との連携で、初年次教育学会と授業づくり研究会が協力するという形で、日本リメディアル教育学会九州・沖縄支部大会を久留米大学で開催することができました。

3部門に分かれた10件の研究発表があり、各会場で参加者の熱心な議論が展開されました。また、基調講演では協同学習を展開する際の具体的な創意工夫のみならず、協同学習を支える認知心理学を中心とした理論的な背景を知ることもできました。

今回、日本リメディアル教育学会との協力で、このような形の「初年次教育実践交流会」を開催できたことは、大変意義深い試みであったと評価しています。(安永悟・久留米大学教員)

#### ◎ 初年次教育実践交流会 「授業づくり研究会」

1. 日 時: 2015年1月31日(土) 13時～17時
2. 場 所: 久留米大学御井学舎学生会館3階ミーティングルーム3
3. 参加者: 58名
4. 実施母体: 安永悟研究室(久留米大学文学部)
5. 内 容:
  - (1)【WS】鹿内信善(北海道教育大学)(2時間15分)
    - a. 題目: 「協同の学びをひきだす看図アプローチ」
    - b. 内容: 看図アプローチに基づく授業づくりについて、下記の点を中心に検討。
      - ① オリジナルなヴィジュアルテキストを使う方法

② 教科書や普通の書籍からヴィジュアルテキストを探してくる方法

③ 人権教育や教科教育に応用する方法

④ 高校数学授業のビデオ視聴と検討

c. 参加者の声：

はじまった瞬間から、参加者は鹿内ワールドに引き込まれました。参加者全員、絵図を食い入るように見つめ、想像を膨らませていました。たった一枚の絵図から、いつの間にかすばらしい作文ができあがったことに、驚きました。その後、グループで作文を読み合い、それぞれの持ち味の良さを堪能しました。作文を仲間から褒められ、笑顔いっぱいのワークでした。(須藤文・久留米大学講師)

(2) 【報告】野上俊一(中村学園大学)ら(25分)

a. 題目：「看図アプローチによる見る力の分析」

b. 内容：保育教育において、学生は「保育者として見る力」を獲得していく。この見る力を評価する手段として看図アプローチを用いた研究を報告。

c. 参加者の声

看図アプローチの活用例を紹介していただきました。同じ写真でも、保育実習前と、保育実習後の学生では、読み取ったことに関する関連づけに差が出るというのは興味深い結果でした。アセスメントツールや協同学習ツールとしての看図アプローチの可能性を感じさせる報告でした。(須藤文・久留米大学講師)

(文責：安永悟・久留米大学)

## 7. 編集担当より

### (1) 賛助会員による広告添付について

賛助会員には、年1回、会員への情報提供の際に、無料で1ページ分の広告添付が認められております。本学会ニュースレターでは第4号より、それまでのメール添付ではなく、**学会ウェブの該当箇所** <http://www.jafye.org/index6/nl7.html> に本文(このファイル)および広告データを次号刊行まで掲載することにいたしました。

なお、学会および学会事務局は、これらの広告内容に関与しておりません。

### (2) 実践事例の募集について

ニュースレターに掲載すべき実践事例や事例紹介などを募集しております。掲載ご希望の方は学会事務局にお知らせください。

### (3) 事務局分室設置について

前号並びにその後のメール等でお知らせしております通り、国際文献社に事務局業務の委託を始めております。その結果、連絡先が下記の通り変更となっておりますので、ご注意ください。

事務局分室 〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

TEL: 03(5937)0473 FAX: 03(3368)2822 E-mail: jafye-office@bunken.co.jp

事務局 金沢工業大学内 藤本元啓研究室

### (4) 第8回大会ウェブサイトについて



4月中旬ごろに開催校である明星大学により準備された大会サイトが一般に公開されましたら、学会サイトからもリンクを設定しますので、ご確認のうえ積極的に研究報告を実施してください。

(編集 広報・情報化担当 沖 清豪)

(2015年3月31日第1版公表)

(2015年4月2日第2版公表)

下線部所属の誤りと誤植1か所を修正しました。失礼いたしました。